

コメント

山口 建治

身体技法と祭祀芸能

1. 張勁松報告「中国瑶族の祭祀者の身体技法」

張先生は、瑶族巫者の身体技法（「肢体表現」）をとりあげ、その祭祀舞は、各種の象徴的な動作が舞踊化され組みあわされた瑶族特有の舞踏であること、手訣（手印とも呼ばれる、手さばきによる信号）と歩罡（足さばき）、字符（字令ともいう、書写による暗号）、占い、特技法術（刀のはしご登りなど）などについても紹介し、その目的はいずれも、巫者が神と通じあい、人と神の世界とを交流させることであると指摘された。祭祀舞は東西南北中という五方五位の転回を重視するというのが、中国の他民族の祭祀舞踊（あるいはまた日本の神楽の舞）ではどうなのか、転回の方法を詳しく比較検討することが興味深い課題となろう。

2. 田耕旭報告「韓国の祭祀芸能における身体技法

—韓国仮面劇に登場する神的存在の身体技法—

田先生は、韓国仮面劇における神的存在の由来とその身体技法との相関性如何という興味深い問題を取り上げられた。

先ず伝統的祭儀に由来する神。閻氏は、物乞いしながら村人を祝福する。チャンジャマリは、模擬的な性行為を行い豊作祈願する。シシタクタギは、袖の広い黒の麻の服を着て赤い棒を持った疫神が小妹閻氏を両班から奪い返す。（しかしこれは所謂「鍾馗説話」の異伝ではないか。）

次に儺礼に由来する神。五方神将は儺礼で演じられた五方鬼舞を継承するもので、雑鬼を追いやる神的存在である。蓮葉とまばたきはそれぞれ天殺星、地殺星を象徴し、これらににらまれれば生き物は死ぬため、顔を隠して登場する。まばたきは瞬きができるよう瞳に細工がしてあり、方相氏の仮面を連想させる。また、南江老人は南極老人とも呼ばれ、人間の寿命を司る神であるから、儺戯の南極星寿老人のことであろう。酔翁は、赤い仮面をかぶり酒に酔った顔をしており手には柳の木を持って登場するのは、高麗末の儺礼の処容に類似する。墨僧も桃の木の枝で先に登場する墨僧を追いやる形式をとり儺の儀礼を継承したものである。

神の由来や性格についての分析は納得できたが、それと身体技法とのかかわりについてはあまり理解できなかった。報告者が韓国の祭儀を大きく二分類して、伝統的な祭儀と中国伝来の儺礼に分けて話されたのが私には興味深かった。韓国に伝来した中国儀礼のなかでも、儺礼の影響が特に深いということであろう。神的存在の「採り物」に注目されたこともたいへん重要である。また、ソム（小妹閻氏）が鍾馗の妹の小妹ソメに由来するという指摘は、日本の鍾馗信仰とも関連する問題で、「儺文化」の東アジアにおける波及伝播の側面から検討できる課題であろう。

3. 大谷津早苗報告「人形に見る身体技法—日中の比較から—」

大谷津先生は、能楽の式三番とも比較しつつ、人形の三番叟を問題に取り上げられた。三番叟の人形は、構造上かならずうなづき形式を持つのにたいして、千歳・翁は形式必ずしもうなづき構造を持たない。三番叟は眼が返り口が開くからくりが施されている。三番叟人形は赤系の彩色を持つ。これら三つの特徴は、能楽の式三番には見られないもので人形の三番叟の独自性を示しており（千歳・翁は後に付け加わったもの）、

三番叟は本来は宗教的な人形であったと指摘された。そしてその身体表現の特徴として、地を踏む、赤色の彩色、返り目・口開、顔を上に向けるうなずきの4点をあげ、そのなかでもうなずきという動作が日本の人形では重要な意味を持つのではないかと問題提起された。

三人の先生の報告から、祭祀芸能の舞踏における五方五位の転回の問題および、祭祀的舞踏の身体技法と密接に関係する道具（採り物）（赤い棒、三番叟人形の返り目の細工など）の比較検討が重要課題として浮かび上がった点は大変有意義であった。中国では、鍾馗 zhongkui は疫鬼を追いやる椎 chui を意味する終葵 zhongkui から生まれた（chui は zhongkui をつづめて発音した音に近似する）架空人物であるとの説があり、「採り物」は祭祀から芸能への発展を跡づける有力な物的証拠になりうるからである。

川田順造先生の所謂「連続の中での比較」という点から見ると、中国の儺礼の影響を東アジア規模で比較検討することがたいへん重要であることにあらためて気づかされた。しかし、総じていえることだが、報告の内容はほぼ祭祀芸能における個々の所作・しぐさの指摘に止まっており、それらの表面的動作の奥にある「暗黙知」（ことばでは言い表せないコツとかカンの類）の領域にまで踏み込んだ分析には至っておらず、「身体技法」という術語をどう理解するかの問題を含めて、今後の課題として残されたと思う。